

『ヴィレット』小論
—— ルーシィ・スノウの自立の過程と孤独 ——

Villette: Lucy Snowe's Independent Process and Solitude

山 畑 淳 子
Atsuko Yamahata

This paper deals with the life of Lucy Snowe in *Villette*: her restricted independent process and a cry of the soul. It is said that the ending of *Villette* is ambiguous. This novel suggests compromise with real life; Lucy Snowe had to accept reality, suffering from her solitude. In the patriarchal society, women had to make a choice whether they should settle down in home or be groping for independence throughout their lives.

I

『ヴィレット』の終り方は曖昧である。陽気な想像力の持ち主には自己充足のロマンスとも一種の成功物語ともとれるし、ひとりの女性の救いようのない悲劇的結末とも、孤独だが満ちたりた静かな結末とも解釈できる。作品の終章で、年老いたルーシィ・スノウは次のように静かに語っている。

Peace, be still! Oh! a thousand weepers, praying in agnony on waiting shores, listened for that voice, but it was not uttered—not uttered till, when the hush came, some could not feel it: till, when the sun returned, his light was night to some!

Here pause: pause at once. There is enough said. Trouble no quiet, kind heart; leave sunny imaginations hope. Let it be theirs to conceive the delight of joy born again fresh out of great terror, the rapture of rescue from peril, the wondrous reprieve from dead, the fruition of return. Let them picture union and a happy succeeding life.¹

本当にポール先生は帰ってくるのだろうか。作品の中には、はっきりと先生の死に触れている箇所はないが、この語りの前後での彼女が聞いたバンシーの鳴き声や、人生においてルーシィが今まで体験してきた不幸な出来事の起こった時と同じ空模様の描写や、この最後の章で、急にマーチモント嬢を思い出させる、彼女の相続人からの遺産の譲渡は一体何を意味するのか。シャーロット・ブロンテは何故、作品を二様にも三様にも解釈できるような曖昧な終わり方でしめくくり、語り手である主人公に息づまるような幽閉感を与えているのだろうか。

もちろん『ヴィレット』には、カソリックとプロテスタントの宗教上の抗争や、ルーシィが時々見る尼僧の幽霊の心象的研究など興味深いテーマが内包されているが、² ルーシィの救いようのない孤独な幽閉感とその反動としての内的希求、そして結末の曖昧な終わり方に何らかの関連があると思われるので、こうした問題について考察してゆきたい。まず語り手であるルーシィ・スノウとは一体どのような女性なのかを彼女の語りの特徴を通して見ながら、作品の中に出てくる女性像と当時の女性の置かれた立場について考察し、では一体、この曖昧な終わり方は何を意味するのかについて考えてゆきたい。

II

One evening—and I was not delirious: I was in my sane mind, I got up—I dressed myself, weak and shaking. The solitude and the stillness of the long dormitory could not be borne any longer; the ghastly white beds were turning into spectres—the coronal of each became a death's head, huge and sunbleached—dead dreams of an elder world and mightier race lay frozen in their wide gaping eye-holes. That evening more firmly than ever fastened into my soul the conviction that Fate was of stone, and Hope a false idol—blind, bloodless, and of granite core. I felt, too, that the trial God had appointed me was gaining its climax, and must now be turned by my own hands, hot, feeble, trembling as they were....³

これは、ルーシィが長い夏季休暇の間、寮で精神薄弱の学生の世話をしている、ついに、その子も親がひき取りにきた後で陥ってしまった状態である。どうしようもない孤独感と

幽閉される感じにさいなまれ、精神的にまいってしまう。ここまでの救いようのない孤独に打ちひしがれてしまうルーシィ・スノウとは一体どのような女性なのか。

この小説の一人称の語り手であるルーシィ・スノウは静かに目立たないように語る女性であり、その名前の他に何も持たぬと言ってよい程、極端に全てを剝奪された女性主人公である。彼女は家族も身元保証人も地位も持たず、目をひく容貌にも恵まれていない。しかし、彼女の名前が与える印象どおりに、冷静で落ちつきはらった理性と優れた感性で周囲を観察し、除々に頭角を表してゆく。では、『ヴィレット』はルーシィ・スノウという女性の自立を軸にした成功物語なのであり、シャーロット・ブロンテはフェミニズムの小説として、この『ヴィレット』を書いたのであろうか。もちろん、『ヴィレット』は、フェミニズム的色彩が濃く出ている小説である。しかし、この作品の中には、一人の女性の社会的、経済的自立の過程の他に、自己の統合、女性としての本音の部分——暖かい家庭、精神の拠り所を築いていたいという平凡な願い——も随所に表われているのではなかろうか。シャーロット・ブロンテは意気高らかにフェミニズムを掲げてこの小説を書いたのではなく、男性中心主義の社会の重苦しい偏重の中での、いろいろな女性の生き方と可能性を、また可能性の開花ゆえに犠牲にせざるをえなかったものを、この作品の中で示しているように思われる。

ルーシィは絶えず理性的であろうとする賢い女性であると思われるが、語り手としては信用のおけない面がある。彼女の周りの人々に対する判断は偏見に満ちていることがあり、自分に都合の悪いことは何も語らない抜け目のないところがある。他方、彼女が強く心引かれたことや印象が、筋の上ではあまり関係のないようなところに書かれており、重要な意味を持っているように思われる。例えば、マーチモントが亡くなり、自活の必要に迫られて相談をしに行ったバレット夫人（昔ルーシィの家の使用人だった）とその家の若奥様であるリー夫人の挿話や、ロンドンからの海上で見かけた若くて美しい女性とドラム缶のように太った醜い夫の二人組、ポーリーナを思い出させる美しい少女と父親の二人の組み合わせは、彼女が送ることのできない方向のある女性の生き方と、それに対するルーシィの正直な内面の思いを示しているように思われる。まず、ルーシィは5章で、リー夫人と彼女の美しい男の子を見て、自分よりも年長なのにもかかわらず、学校では下のクラスにいた美しいが、お勉強のあまりよくできなかった少女が、妻であり、母であることの自信によって美しく優しく輝き、末頼もしく成熟している姿に賞賛の声をあげ、一種の憧憬を感じているようだ。しかし、リー夫人の方は、ルーシィには気付かない。彼女は夫人の傍

にいた家庭教師同様に扱われている外国人の乳母に気付き、バレット夫人から、外国人の家庭ではイギリス人の女性がこのような職についていることを聞き、こうした情報をたくわえ、必要な時には使おうと思う。ルーシィ・スノウにとって自立への道は、生きていく上で、必要に迫られたものであって、自ら進んで、他の可能性があるのにそれを捨ててまで選んだ道ではないことが示されている。身寄りもなければ、財産もなく、容貌もぱっとしない彼女にとって、当時の他の女性の生きる道から隔てられ、家庭教師か、子守りか、コンパニオンか、教師になるしかない限られた自立への過程はとても辛いものであったにちがいない。孤児故に人一倍強い孤独感を抱えながら、暖かい家庭や愛への渇き、そうしたものの劣等感を裏腹に原動力として持つ歩みだったのではなかろうか。彼女は物静かでおとなしい面を持つ反面、自分の賢さに対する自負が強く、男性に保護を求める女性に対して、一種の嫌悪感ともいえるほどの冷やかな目を向けている。船上でのドラム缶のように太った夫に寄り添った若くて美しい夫人へも、過保護な父親に譲られている美しい少女へも、船上で知り合った美しい少女ジネヴラ・ファンショウから聞いた彼女の姉達の行く末——皆、お金持ちでずっと年上の紳士達と結婚しなければならない身の上——についても、ルーシィ・スノウは冷やかに観察しつづけ、“Stone walls do not a prison make, / Nor iron bars — a cage.”と感じている。⁴ これらの挿話は、ルーシィ・スノウが男性によって服従させられ、形づくられてしまうことへ反感を持っている一面と、自我の強さを静かな語りの中に示している。

また、ポーリーナが初めは父親に頼りきり、慣れぬ小さな手でかいがいしく父親の給仕をし、父親がいなくなると、グレアムにその代理を求め、尽くす様子をルーシィ・スノウは超然と観察し続け、ただ一行だけで自分のことを“I, Lucy Snowe, was calm.”と言っている。⁵ ルーシィ・スノウの語り口は巧妙なので、後半に行かなければ、彼女がグレアムに内心は憧れており、秘かに彼のことを観察しつづけていたことが分からないようにできているが、ここでルーシィはあえて、冷静さを保とうと努力しているような印象を読者に与えている。本質的に冷静であり、そうしていることが苦痛でないならば、あえて、言いきかせるかのように突然に、自分のことを「冷静であった」と強調する必要があるだろうか。この一行はルーシィの普段の行動規範と彼女がそうありたいと思う自分の理想を示しているとともに、ルーシィは分別ある女性なので、人目をひく容貌にも性格にも恵まれない彼女が、自分の情熱の望むままに行動しても、どんなに報われえないかを知っている故の自己防衛手段であると思う。つまり、ルーシィはポーリーナに対しては、自分の気

持ちに率直に男性に保護を求めうる行動力を羨望を持って眺めながら、自分はそのように行動してはならないことを知っており、男性達が忙しいとかまってもらえないで、淋しそうにしているポーリーナを、ある意味で、自分の分身として、冷やかに見ているのである。ここにも、自分で自分自身を閉じ込めてしまう幽閉・孤独感が漂っている。

ルーシィとポーリーナは立場は違うが、同時代に生きた女性としての、そして偶然にも少女時代の一時期をブレトン家で過ごした仲間としての一体感を共有している。ポーリーナは、幼少の頃からそうであったが、他の人に見せない一面をルーシーにだけは見せ、その他の特に気に入られたい人の前では、相手が望むような話し方をし、行動をする。父親の前ではドイツ語やフランス語が堪能なことを内に隠し、いつまでも幼い子供として、ブレトン夫人に対しては従順で、依存心のある様子を、ジョン、グレアム、ブレトンに対しては、とても内気な、時には冷たく、彼を避けようとするかのようににはにかむ態度を見せる。⁶

彼女を溺愛する父親がポーリーナとグレアムとの結婚をようやく認めてからも、彼らが仲たがいせぬように、二人の仲を引き裂かれぬようにと、ポーリーナは父親の髪とジョンの髪を編み込んでロケットの中にしまい込み、お守りとして胸に隠す。⁷ ここにも呪縛、あるいは幽閉のイメージが表れている。ポーリーナは恵まれた星の下に生まれた、ルーシィにとってけっして望むことのできない羨ましい道を歩んでいく女性である。しかし、そのポーリーナでさえ、自分の幸せをつかむために、本来の自分を隠し、周囲の人の望むように行動し、自分だけではなく回りの者をも呪縛、あるいは幽閉のイメージの中に閉じ込めようとしている。

ポーリーナやジネヴラのように男性の庇護を求めて生きてゆく、ルーシィの道とは逆方向への課程は、ルーシィがどんなに望んでもたどれない道程であり、その道にすら幽閉のイメージがつきまとうのである。このように、ルーシィ・スノウの自立への歩みは、生きてゆく必要から差し迫られたものであり、その背後に、男性に対して素直に援助を求めうる女性への羨望と軽蔑、自分はそうなりえないためにあえて理知的で冷静であろうとする認識の二方向の流れが働いている。

III

ルーシィ・スノウの内的探究と自立への歩みに関して大きな影響力を持ち、無視するこ

とのできない女性は、年老いたマーチモント嬢と大陸はラバスクールの女子寄宿学校長のベック夫人、そしてその対極にある位置を占めるブレトン夫人である。マーチモントについてはこの作品の曖昧な結末と関係があると思われるので、後で述べたいと思う。ブレトン夫人は当時の家夫長制度の中で、模範と思われる良き家庭夫人である。ルーシィはブレトン夫人の絶えず落ち着きはらった態度や人生の困難を勇気をもって乗り切り、一人息子のジョンを医師としてりっぱに成長させた才覚に尊敬の念を抱きながらも、一人息子のジョンを偏愛する傾向や、精神的にこの親子がいつまでも密着しているありさまを冷やかに語っている。例えば、ブレトン夫人はお茶の時間にケーキを許すときでも、ポーリーナの要求に従い、グレアムにだけケーキを1切れあげている。また、成長し、成人したジョン医師は、クレオパトラの官能的な絵に対しても、自分の母親のことを持ち出して、無神経にも母の方がずっと美しい女性だと言っている。ルーシィ・スノウは、テラスのある家でブレトン夫人に彼女の心の中にある苦しみ、救いようのない孤独感について話そうとするが、夫人とはあまりにも境遇がちがうので、この苦しみは分かちあえないと悟り、語るのをやめてしまう。

.... Further, on this subject, I did not consider it advisable to dwell, for the details of what I had undergone belonged to a portion of my existence in which I never expected my godmother to take a share. Into what a new region would such a confidence have led that hale, serene nature! The difference between her and me might be figured by that between the stately ship, cruising safe on smooth seas, with its full complement of crew, a captain gay and brave, and venturous and provident; and the life-boat, which most days of the year lies dry and solitary in an old, dark boat-house, only putting to sea when the billows run high in rough weather, when cloud encounters water, when danger and death divide between them the rule of the great deep. No, the 'Louisa Bretton' never was out of harbour on such a night, and in such a scene: her crew could not conceive it; so the half-drowned life-boat man keeps his own counsel, and spins no yarns.⁸

ルーシィはブレトン夫人にこの時代の母親の鑑たるものを見出し、その母性的なるものの暖かさ、居心地の良さをテラスのあるブレトン家の懐かしい部屋に見出し、あこが

れながらも、もっと長居をしてとどまるようにと勧めるブレトン親子に対して、別れの悲しさを早く乗り越えて、フォセット通りに腰を落ち着けたいからと断っている。ルーシィの中には家庭的なものや家に対して希求する気持ちと、それを抑制してそこから離れていこうとする二方向の動きが、絶えず動いている。ルーシィはこの時代の家庭婦人の鑑としての賢婦人の像をブレトン夫人に見出し、その行き届いた家庭的な暖かさを渴望しながらも、そうした親切をほしいままに浴するよりも、そこにはジョンへの思慕を抑制しようとする作用もあると思われるが、それをあえて立ち切り、孤独な道を歩むことを選んでいる。つまり、母性的なものにあこがれながらも、自分がそれに飢えており、ふさわしくないことを自覚しているルーシィ・スノウは、あえて孤独な、地味で着実な第一歩を進むことを自ら選んだのである。

ルーシィの経済的、社会的自立の道の先駆けとなり、彼女が静かなライバル意識を持って目ざす人はベック夫人である。ベック夫人は、音をたてないスリッパをはき、学校全体を監視と管理によって支配しており、大胆な試みと細心の統轄による学校経営のうまさはそのあたりの学校の中でも、際立っていて、口やかましいご父兄をも丸めこんでしまう。ベック夫人は鍵穴から中を覗き、立ちぎきをし、ドアに油をさして、合鍵を作り、引き出しを開け、たえずルーシィに対しても監視の目を光らせている。ここにも監視による閉じ込められてしまう感じが漂っている。ルーシィは夫人の顔は石で出来ており、その顔付は男のようであると言っている。夫人は3人の子供を持つ未亡人であるが、この学校長は学校の経営と監理の方は成功を収めてはいるが、子育ての方はうまくいっておらず、ルーシィは、夫人は小さい子供達を膝の上へのせたり、暖かく抱きしめてやりたいという願いを感じることがないようだと言っている。事実、子供の中でもデジレは母親の抑圧が反抗を生み出す構図を示しており、ベック夫人の悪い面をデフォルメした子供となっている。ルーシィ・スノウにとって学校経営のやり手であり、自立した女性であるベック夫人は男性的で、母性を剥奪された人なのである。このことはこの作品の結末の曖昧性—— 帰らぬ恋人を待つルーシィ—— に対する伏線になっているとも読めるのではないか。夫人はルーシィと同様、ジョンにも好意を持ち、ポール、エマニュエルにも人知れず好意を抱き、彼を自分の掌の中に収めておきたいと望んでいる。この自立した女性は、母性としての慈しみは薄い人であるが、女性としての情熱を内に秘めた、利己的でたくましい人なのである。

IV

ルーシィ・スノウの語りをきいていると、彼女の自立への歩みは、必然的に迫られたものであり、子守り兼家庭教師から教壇に立つほどの昇格や、彼女の学問や論文への向上心は、ベック夫人やポール先生にむりやり強いられたものであり、彼女はしぶしぶそれらを受け入れてきたかのような印象を受ける。経済的自立の必要はやむを得ないことであるが、これに対しても彼女は、静かに、着実に、自分のものとして受け入れ、ジネブラにもベック夫人にも働かざるをえない必要について堂々と述べている。また、英語科のウィルソン先生の代わりに初めて教壇に立つように、ベック夫人に命じられた時のことを次のように語っている。

.... If let to myself, I should infallibly have let this chance slip. Inadventurous, unstirred by impulses of practical ambition, I was capable of sitting twenty years teaching infants the hornbook, turning silk dresses, and making children's frocks⁹

また、第二学級の教室の入口のところでベック夫人に“Will you go backward or forward?”と聞かれて、ルーシィは自ら“En avant, [Forward]”と答え、¹⁰ いざとなると強い、彼女の向上心を示している。また、12章の初めの方でルーシィは「禁断の小径」に出て、学校の寮にいた幼い頃のことを“I did long, achingly, then and for four-and-twenty hours afterwards, for something to fetch me out of my present existence, and lead me upwards and onwards.”と回想している。¹¹ つまり、彼女は、幼い頃から、静かに胸に秘めた向上したいという渴望が、人生の光の中で影としてみすごされてきただけに人一倍強く、この状態では危険なほどの幽閉感、孤独感を持って根づいていたのである。

ルーシィの向上したいという渴望は、他の人にも読者にも分からないように秘めやかに語られているが、ベック夫人とポールだけは彼女の普段の着実な勉強と向上心に気づいていたのである。他の人はルーシィのことを影のように目立たない存在と考えているのにもかかわらず、中でもポールは、ルーシィの向上したいという情熱と、その原動力となっている彼女の内面の救いようのない程の孤独に気づいている。

私だって感情を持っているとディレンマに陥っているルーシィに情熱の火をつけたのは

ベック夫人のお祝いの日に催された、小喜劇に出演したことである。彼女は自分に割り当てられたしゃれ者の役をジネヴラの恋愛当事者に当てはめて、役の性格を全く変えてしまい、演劇的表現に対する鋭い感性を彼女が持っていることを表してしまう。またルーシィは男役の衣裳についてもピエール嬢の要求をきき入れず、誰のおせっかいも受けたくないし、自分で考えて着付けをさせてほしいと要求する我の強さをもの静かな普段の立ち振舞いの下に持っている。

ジョン先生から手紙が来なくなり、それも彼がポーリーナと再会して親しくなった故だと悟った後で、ルーシィはジョンからの大切な手紙をガラス瓶に入れて埋葬し、オーロラを見て “If life be a war, it seemed my destiny to conduct it single-handed.” と感じる。¹² また、ルーシィはブレトン夫人に招かれて、ブレトン邸でバッソンピエール伯爵親子に自分が教師をしていることを述べる機会を夫人が与えてくれた時、とてもうれしかったと語っている。このあたりからルーシィには自分の職業に対する自信が生まれ、自立への明確な道を心に描いているようである。彼女はポーリーナのコンパニオンをその父親から頼まれた時も、彼女はもはや輝かしい女性、バッソンピエール伯爵令嬢の影ではなかったと語り、他人にすがって生きてゆく生活を辞退している。生きる糧としての経済的必要性から考えるならば、バッソンピエール伯爵の申し出はベック夫人の女学校の教師としての俸給よりけっして悪いことはないのだが、ルーシィは家庭教師として将来の可能性を限られてしまうことを避けたがっている。この頃から、彼女の胸には、後の章でわずかに語られているように、小さな学校を経営する人生の設計が出来ていたと思われる。¹³ 子守り兼家庭教師から成り上がり、今やベック夫人や、ジネヴラの従妹ポーリーナも彼女を丁寧に対うまでとなったルーシィの昇進ぶりに対してはジネヴラでさえも、“Who are you, Miss Snowe ?” とたずねる程である。そしてルーシィ自身、自信をもって、自分の向上したい気質を認め “I am a rising character: once an old lady’s companion, then a nursery-governess, now a school-teacher.” と言っている。¹⁴ ルーシィは初めて教壇に立った時もベック夫人を見習うかのような圧制的授業の仕方で、気に入らない教師はいつでも辞めさせることができると考えている第2学級の生徒達を圧制する手腕を示しているし、時折、まとわりついて迷惑だとジネヴラのことを考える時には、彼女の肘を防ぐために、時々帯にわざとピンを刺しておく才覚をも持ち合わせていて、地味な立ち振るまいの中に教師としてうまくやってゆける力を持っている。

ルーシィはベック夫人でさえも、はじめはさして高くない地位から始めたことを聞き、

“[B]egin with taking day-pupils, and so work my way upwards.” と思い、自分に對して勇気を出すように、“[B]e content to labour for independence until you have proved, by winning that prize, your right to look higher.” と呼びかけ、¹⁵ ベック夫人を目ざして、いずれ学校を經營することを心に描く。

ルーシィ・スノウが精神的にも社会経済的にも自立し、向上していくためには、さらに彼女の心の飢えた部分——ジョンからの手紙を埋葬し、その思慕を消し去った心の空洞を埋めつくしてくれるポールの友愛と、彼女の学問知識の不消化な部分を正しく導いてくれるポール先生の援助——が必要であった。ルーシィはジョンに抱いていたロマンティックな憧れの空しさを葬り去り、ポールとの知的友愛の中に自分を昇華させていく。

V

ルーシィ・スノウは苦難に満ちた自己探究の道を経て、自己を確立し、城外の学校を住居兼経済的基盤として持ち、ポールの援助という男性の愛情をも手に入れることができたのも束の間であった。結末のポールの死を暗示するような終わり方は、ルーシィ・スノウにとって果して幸福な結末であったといえるであろうか。彼女はポールの帰りを待つ3年間は、人生において一番幸せな時期であったと言っているし、“Strange to say——strange, yet true, and owning many parallels in life's experience——that anticipatory craunch proved all——yes——nearly *all* the torture.” と言っており、¹⁶ ポールの帰ってくる日に彼女はマーチモントの死に際にきいたのと同じ、バンシーの泣き声を聞き、彼女の人生とマーチモントとの類似を読者に印象づけている。R.B. マーチンも「予示の段階で、マーチモント嬢の死はルーシィの将来の生活の先解れとしての位置を占めている」と言っている。¹⁷ こうした点から、おそらくポールは難破して戻らないか、あるいは戻ってきて結ばれたとしても、官能的なクレオパトラの絵に憤慨して、「ある女性の一生」と題した娘—妻—母—未亡人という4枚の絵画を女性の理想的生き方としてルーシィに押しつけるポールと静かで理性的な仮面の下に私の強さ・頑固さを持つルーシィとでは、長期に及んでは、うまく折り合わなかったのではないか。

この4枚の絵に対しても、ルーシィは、膨脹した肉の固まりとしてとらえたクレオパトラの絵に対して抱いたのと同じ嫌悪を抱き、“flat, dead, pale and formal” と見なししているからである。¹⁸

また、ポールは、優秀な歴史の先生パナッシュ夫人を鼻持ちならないと思い、彼女の授業を妨害したり、学生に文学を朗読するときも都合が悪いと自ら判断した箇所は原作を勝手に改作してしまう。こうした点をルーシィはナポレオンのようにだと観察しているのだが、ルーシィが知識の上で彼を越えそうになったとき、ポールは、パナッシュ夫人に対して行なったような行動をルーシィにはとらないと言えるだろうか。

マーティンは「静まりかえり、隔離された、この城外の小さな家の中においては、ルーシィとポールの間のあらゆる障害はついに無くなった」と言っている。¹⁹ 確かにふたりの間では、宗派を乗り越えた相互理解がポールの旅立つ直前の瞬間にだけ存在している。しかし、それも束の間のことであり、ルーシィは信仰を変える気は毛頭ないし、何よりも、ポールの囲りにいる彼の宗派の人々——ベック夫人やシラー神父、それにワルラヴァン夫人——が、宗派の違うふたりの結びつきをけっして許さず、ほとんど言葉も交わす間もないうちに、ふたりを引き離してしまうのである。

この小説を単にひとりの女性の社会経済的自立の成功物語という観点から見れば、結末のポールの死はルーシィにとって幸福であったと言えるかもしれない。²⁰ R.A. コルビィは「思い出すことはルーシィの感情を浄化するものである。」と述べているが、²¹ ルーシィの女性としての平凡な、暖かい家庭を築きたいという願望と、孤児ゆえに人一倍強い、病的なまでの孤独感は、ひどい劣等感を持っていただけに、彼女にも将来を約束した人がいて、愛し愛されたことがあったという美しい思い出だけですっかり癒されたとは思われない。ルーシィはさまざまな学校経営の難問にぶつかり、その度ごとにポールから送られてきた手紙の助言を頼りに、過去にしがみつき、またベック夫人の成功例を見習いながら学校を運営していくのであろうが、おそらく、彼女の女性としての満たされない孤独感をひきずって生きていくのではなかろうか。4章で、ルーシィはマーチモントのことを第一印象が悪く、長年の孤独のため陰険で怒りっぽく、苛酷な面さえあるが、しばらく話してみると尊敬できる人物と評している。ルーシィ自身も、満たされない屈折した孤独感を抱えながら、そのような性格に閉じ込めてしまう可能性は多いにあるのである。

ルーシィがベック夫人を目ざし、男性社会に奉仕する女性を創り上げていくかどうかは、読者の想像力に任されている。彼女は異国のラバスクールにおいて、始めのうちは、女性の才能を開化させる主義の教育を行なうかもしれないが、自らの孤独と照らし合わせて、こうした教育が無駄であると悟り、ベック夫人の教育方針のような男性社会に貢献し、順応してゆける女性を育てる教育をこの異国で行なうことに甘んじ、ある程度生計の貯えが

できてしまえば退いて、マーチモントのような静かで引き込もった、悠々自適の生活を送るのではなかろうか。満たされない、屈折した孤独感を抱えながら。

この作品の曖昧な終わり方は、喜劇か悲劇かまたはロマンスなのか。それとも、ただ妥協を提示しているのだろうか。シャーロットはこの作品の終りで、女性の社会経済的自立の過程と、自己の統合を示し、暖かい家庭を持つことができるかもしれないという僅かな希望を残しながらも、ルーシィ・スノウに悲劇的な恋人の死を暗示させる語りをさせているのは、この時代の男性中心主義の社会に対するシャーロットの時代を先取りしたひとつの挑戦状だったのではないか。ルーシィが社会経済的自立の手段を発揮できるのも、恋人の不在中という限られた状況下でのことなのである。シャーロットが生れたのは、男性の権威によって支配された時代であった。書くことも考えることもいわゆる「女性らしい」こととは考えられなかった当時、女性はずっと男性によって規定されていたので、社会においても自由に自らの立場を明示することはできなかったのである。²² 家父長制社会の中では女性は、自分の能力の開化と、暖い家庭の構築の両立を望みながらもそのどちらかひとつだけしか選ばざるをえなかったのである。一方に居るのが、ブレトン夫人、ポーリーナ、ジネヴラであり、もう一つの流れに居るのが、ベック夫人、マーチモント、ルーシィなのである。ルーシィ・スノウは孤独と美しい思い出を抱えながら、恋の終わりは人生の終わりではないと慰めつつ、生き続けなければならなかったのではないか。

この作品を『ジェーン・エア』のような自己充足のロマンスととらえることは、ロマンスにおける恋愛の成就と幸福な結末という点で欠格と言わなければならない。恋人の死の暗示という点からも喜ばしい喜劇的結末とは言えない。ニナ・アウエルバッハは「ルーシィは、唯一可能な家庭の喪失によって、小説の始めと同じように疎外されている」と言っているが、²³ ルーシィは再び何もかも剥奪された状態に戻ってしまうと読めるだろうか。全く救いようのない悲劇的結末として読めるかということ、小さいながらも女子学校長としての社会経済的自立とそれへの自信、フィアンセからの援助という暖い思い出が存在した点で、ルーシィの魂の孤独からの救いは僅かにあるのだから、全くの悲劇的結末とも言えないのではないか。この作品は、こうした点で、やむをえない現実生活の受け入れと、多くの可能性を内包しながらも一つしか叶わなかった当時の女性の妥協的立場と孤独を静かな語りの中に示しているのではなかろうか。

註

- 1 引用箇所は全て次のものに拠った。
Charlotte Bronrë, *Villette*, ed. Tony Tanner (Suffolk: Penguin Books, 1853),
p.596.
- 2 Cf. Robert B. Heilman, 'Charlotte Brontë's "New" Gothic,' in *Twentieth
Century Views: The Brontës*, ed. Ian Gregor (New Jersey: Prentice-Hall,
1970), pp.96-109.
- 3 Tanner, p.232.
- 4 Tanner, p.117.
- 5 Tanner, p.79.
- 6 Tanner, p.384.
- 7 Tanner, p.532.
- 8 Tanner, p.254.
- 9 Tanner, pp.139-40.
- 10 Tanner, p.141.
- 11 Tanner, p.176.
- 12 Tanner, p.381.
- 13 Cf. Tanner, pp.450, 537.
- 14 Tanner, pp.392-94
- 15 Tanner, p.450.
- 16 Tanner, p.593.
- 17 R. B. Martin, " *Villette* and the Acceptance of Suffering," in *Charlotte
Brontë: Jane Eyre and Villette*, ed. Miriam Allott (London: Macmillan,
1973), p.221.
- 18 Tanner, p.277.
- 19 Martin, p.225.
- 20 Cf. R. A. Colby, "Lucy Snowe and the Good Governess," Allott, p.236.
- 21 R. A. Colby, " *Villette* and the Life of the Mind," *PMLA*, 75 (1960), p.415.
- 22 Cf. Tanner, p.45.
- 23 Nina Auerbach, *Romantic Imprisonment: Women and Other Glorified*

Outcasts (New York: Columbia Univ. Press, 1985), p.205. もっとも、彼女は、この論文は大学院生のときに書いたもので、今では見方が違っているが、彼女の初期の意気揚々とした発見を残しておきたいと断っている。